
素直になれたら

天川 七

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素直になれたら

【Nコード】

N0396S

【作者名】

天川 七

【あらすじ】

委員長の浅羽あのみほ 芽衣めいには天敵がいる。

奴やつこと、喜田川きたがわ 光地こうじとの関係は、周囲が認める犬猿の仲だ。

嫌がらせのような悪ふざけに、芽衣のストレスは毎日臨界点突破状態。

芽衣は思っていた。絶対に奴を好きになることはない。

しかし……。

絶対に奴を好きになることはない、そう思っていた。

クラス委員長の浅羽芽衣あきはめいは、騒がしい教室に知的な目を細め、細身の紅い眼鏡を指先で押し上げた。

頭痛がする。これからホームルームが始まるというのに、高校一年生にもなつて、このクラスにはまとまりというものが無い。

もともと委員長にもなりたくてなつたわけではなく、担任に泣き付かれて引き受けたのだ。今となってはかなり後悔している。

「静かにしてくださいっ！ もう先生がくるよ！！」

「まーた真面目ちゃんがなにか言ってるぜ。皆、どーするよ？」

「知らねえー」

「勝手にやらせとけば？」

騒ぎの中心にいる奴が仲間に見ると、ふざけた笑い声があがる。

奴ことクラスーのお調子者、喜田川光地きたがわこうじは、芽衣の天敵だ。

整った顔と、柔らかそうそうな茶髪。その口元は意地悪に笑っていることが多いが、クラスの女子からはそこがいいと人気がある。芽衣には理解できないが。

「光地君、いいかげんにしなよ。先生に怒られるよ？」

「そうだけ。先生の前に、委員長がそろそろぶち切れるぞ」

クラスメイトが騒ぎを収めようと協力してくれるが、それは芽衣の怒りに油を注ぐだけだった。

そう、もはやクラスではこれが普通になっている。一言で言い表すなら、二人が犬猿の仲だからだ。

芽衣は深く息を吸つと、とうとう低い怒声を上げた。

「そこのお調子者と不愉快な仲間達、いい加減にしな。いいから、さっさと、席につけ！！」

「ひゃー、怖っ！ 委員長つたら迫力満点だな」

「ははっ、オレ達のこと不愉快な仲間達だつてよ。こんなに愉快的なのにねえ」

「委員長のネーミングセンスって毎回笑えるよな？」

「だな。しかも真面目ちゃんは、けっこう口が悪いときてる」

叱り飛ばされて、ようやく机を戻しに動く集団に、芽衣は内心誰のせいだと思いつきり突っ込んだ。

その時、チャイムが鳴り響いた。そして担任と副委員長の伊藤いとうか馬ずまが姿を現す。

「やあ、おはよう諸君。今日はもう終了かな？」

「先生、見世物じゃないんすから。怒り心頭の芽衣に、ガソリンぶっ掛けないで下さいよ」

「一馬、あんたのはフォローになってないから。先生は早くホームルームを始めて下さい」

こうして、今日も芽衣の朝は始まった。深々とため息が出る。なんともし先行きが不安だった。

全ての授業が終了すると、芽衣はさつと教科書を片付けて、帰る準備をする。

「あれえ？ そんなに慌ててどうしたよ。真面目ちゃんはその後塾でもいくの？」

どこまでも馬鹿にしながら絡んでくる光地に、芽衣はちらりと視線を投げて、吐き捨てた。

「お調子者、あんたには関係ないでしょ。とつととお家に帰ったら？」

「真面目ちゃんは冷たいねえ。いつから学年一位でも、お前みたいにお高くとまってる奴、オレはごめんだな」

「それは幸いだね。私もあんたみたいなお調子者はお金を積まれてもごめんだよ。一馬、今日は先に帰るね。また明日」

「ああ、また明日な」

芽衣は光地を無視して、挨拶もそこそこに教室を出る。今日は急いで帰らなければいけない。

しかし学校を出た所で、はっとした。課題のプリントを忘れていたのだ。

即座に踵を返した芽衣は、学校へ戻ると上履きを履くのももどかしく、階段を駆け上がる。

廊下を早足で歩きながら、迂闊な自分に舌打ちする。もう一度、あのお調子者と顔を合わすかと思うと気が滅入った。

教室の傍まで来ると中から声が聞こえて、芽衣はぎくりと身体を強張らせる。

「伊藤もさあ、よく副委員長なんかする気になったな。真面目ちゃんに扱き使われてんじゃねえの？」

「ははっ、酷い言われようだな。芽衣はそんなことしないぜ？ きついとこもあるけどさ、あいつは凄い良い奴だよ」

「へえー？ 本当かねえ？ 眉間にいつも皺よせてるし、おっかない顔しちゃってさ。あいつは絶対女じゃないね」

「オレもそう思う。委員長って頭は凄くいいけど、なんかとっつきにくいんだよな」

「だよなー？」

その瞬間、芽衣は本日二度目のマジ切れをした。

パンツと乱暴に教室の扉を開くと、固まった集団が出迎えてくれる。

芽衣は周囲を一睨みすると、無言で自分の机に戻り、目的のプリントを取り出す。

「あー……今の、聞いて？」

気まずそうに話しかけてくるお調子者を黙殺して、芽衣は鞆にプリントを入れるとスタスタと戻る。

そして、扉の前でぴたりと止まると、顔だけ振り振り向かせ一言返した。

「大丈夫だよ。わたしも陰口叩くような女々しい奴は、男じゃないって思ってるから」

これまでにない冷やかな視線をくれてやると、芽衣は教室を後にした。

芽衣は滲む涙を拭って、道を歩き出す。

強く唇を噛む。悔しかった。なにも知らないくせにと叫びたくなつた。言いたい放題言っていたあいつ等を、心の底からぶっ飛ばしてやりたい。

自分が学年一位を取ったのは、頭が良いからじゃない。叶えたい願いのために必死に努力したからだ。

芽衣は中学の頃からボランティアで老人施設を回っていた。そしてそこで夢を見つけたのだ。

介護士になりたい。将来的には資格をとり、福祉関係の仕事につきたい、そう思うようになった。

だが両親はそれを一時の気の迷いと取り、良い顔をしない。

そこで芽衣は考えた。両親が反対するのなら、その反対をねじ伏せられるほど、自分が本気だと示せばいい。

だから芽衣は勉強を頑張り、成績をキープすることで両親に理解を得ようとしていたのだ。

たとえ誰に馬鹿にされても、夢のために頑張ろう。

芽衣は気持ちを落ち着けると、家へと急いだ。

次の日の朝早く、芽衣はいつも通り教室に一番乗りして、さっそく教科書を開いていた。

昨日、家庭教師をしてくれた姉に教わったことを復習して、今日の授業に備える。

誰かが来るまでにはまだ時間があるはずだ。

しかし始めて十分もしない内に、近づく足音に芽衣は気付く。

仕方なく勉強道具を片付ける。相手が誰なのかは知らないが、自分の努力を人に見せる気はなかった。

ガラリと扉が開く。何気なく目を向けた芽衣は、次の瞬間顔を背ける。

「あ……っ」

口ごもったのは、今一番会いたくない奴だった。

芽衣は光地の反応に何も返さず、鞆の中からI podを取り出すと、ヘッドホンを耳に持っていく。音楽でも聴いていた方がまだましだ。

だが、その手が耳に届く前に手首を掴まれる。

無言で見つめてくる光地に、芽衣は嫌々ながら口を開いた。

「……なに？」

「……………」

「用がないなら離してよ」

「……………」

それでも無言でいる光地に、芽衣の忍耐はすぐに限界を迎える。

「いい加減に……っ」

「ごめん」

思わず怒鳴りそうになった時、突然、ぽつりと呟くように謝られた。

相手の思わぬ反応に芽衣は目を見開く。

「ごめん。悪かった。まさか聞かれるなんて思ってたんだ……」

俯いて謝る光地に、いつものお調子者めいた様子はない。しかし、芽衣にはその謝罪は到底信じられないものだった。

なによ、今度は謝った振りして私をからかおうってわけ？

子供じみた嫌がらせに、芽衣は呆れて首を振った。

「あんたの謝罪なんか欲しくない。どうせまたふざけてるだけですよ？ もういいから、話しかけてこないで」

「違う……っ、オレは本気で悪かったって思ってるんだ！ あの時だって本気で言ったわけじゃ……」

「さんざんあなたにからかわれてきた私が、それを信じると思うの？」

芽衣は腕を振り払った。そして、動揺している光地を冷ややかな目で見る。

「もう十分でしょ？ あんたが私を嫌いなのはよくわかったし、私もあんたが嫌いだよ」

切り捨てるように言うと、光地が顔を強張らせた。

「……わかった。今まで本当に、悪かったな」

静かにそれだけ口にして、光地が離れていく。その沈んだ表情に、何故か胸が痛んだが、芽衣はそれを無視した。

芽衣は今度こそヘッドホンを耳につけて、目を閉じる。

学校で彼を見たのはその日が最後だった。

芽衣の天敵だった喜田川光地は、親の都合で転校して行ったのだ。

二カ月後、芽衣は奇妙な喪失感を感じながら学校生活を送っていた。

天敵だった奴が消え去り、気分は良い筈なのに、何故か心が曇っている。

あの日から、お調子者の不愉快な仲間達も、芽衣に対してあからさまな嫌がらせをすることがなくなった。

ストレスの原因は一掃されたはずなのに、一馬からは笑顔が減ったとさえ言われた。

芽衣は、今日も集中できない勉強に精を出しているが、何故なのか、奴が消えてから自分は絶不調だ。

ため息を吐きつつ、国語の教本を開く。だが、すぐにわからない漢字を見つけて、ロッカーから辞書を引っ張り出した。

ページをパラパラ捲っていると、何かがヒラヒラと落ちてきた。なんだろうと拾って見れば、それは折りたたまれた便箋だった。

芽衣は首を傾げて、そつと開いて見る。

そこには一文だけ文字が書かれていた。

『ずつとキミが好きでした』

その瞬間、芽衣は目を見開いて、震えだした手で口元を覆う。相手が誰なのか、一瞬でわかったのだ。

「う……そ……」

天敵だと言ったのは誰だったのだろうか。芽衣はようやく自分の気持ちに気付いたのだった。

(後書き)

はじめまして。後書きの場に、思わず背筋が伸びて、ついにつりそうになってる七です。

芽衣と光地の「素直になれたら」はいかがでしたか？

実は短編を書くのは初めての試みで、いつもと勝手が違うこともあり、四苦八苦しながら書きました。

なので、もしかしたらジタバタした痕跡が残っているかもしれないが、暖かい目で見守って頂ければ嬉しいです。

最後になりましたが、読んでくれた貴方に、何かを感じて頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0396s/>

素直になれたら

2011年4月4日00時55分発行